

多様な地域の実情に合った ITS の社会実装を考える

～ 現場の実情・実例から学ぶ 福島県会津若松市編 ～

〔ご報告〕

ITS Japanでは『第3期中期計画（2016～2020年度）』*の『多様な地域の実情に合ったITSの社会実装』の具体化に向けて、基礎自治体や地域ごとのITS推進団体等との連携強化を図りつつ、『現場を知る』ことを活動の重点に据え、地域の課題や先進的な取り組み、事例について、現地訪問や関係者との意見交換を中心とした活動を進めています。

(※ITS Japan第3期中期計画 http://www.its-jp.org/katsudou2014/tabid_210/)

地域公共交通フォーラム・中心市街地活性化セミナー参加報告

2月22日に、福島県会津若松市ならびに市と連携した活動を進めている福島大学吉田准教授で企画された『地域公共交通フォーラム・中心市街地活性化セミナー バスに乗ってまちに出かけよう～生活を支える交通から楽しみの交通へ～』に参加しましたので、その概要を紹介します。また、2月21日には地域の暮らしの足を守る金川町・田園町住民コミュニティバス運営協議会とも意見交換を実施しました。

1. 地域公共交通フォーラムの概観

本フォーラムでは、会津若松市の商工会関係者、交通事業者、市民や福島大学吉田ゼミの学生を含む120名程の参加者があり、会津若松市公共交通会議事務局、市中心市街地活性化協議会と福島大学吉田ゼミの学生から、取り組み事例の紹介がありました。

また、『まちを元気にする公共交通の力～新たなモビリティサービスを地域づくりに活かす～』をテーマに、福島大学吉田准教授とITS Japan天野専務理事による対談が行われました。

2. 地域公共交通フォーラムでの取り組み事例紹介

1) 会津若松市における「楽しみ×公共交通」の取り組み

会津若松市公共交通会議事務局から、金川町・田園町さわやか号の取り組みとして、楽しみとバス利用をパッケージしたランチ会、スーパーとの連携による買い物ポイント、乗車体験ツアー、走る地域サロンなどが紹介がされました。ランチ会は、利用者が減少傾向にあった状況を打開するために企画されたもので、バスの利用促進だけでなく、地域や高齢者の交流場ともなっています。また、地元スーパーのリオンドールとの連携で、買い物金額に応じてポイントが付与したり、スーパーの電子マネーでバス運賃の支払いが可能になっています。



2) まちの楽しさを知って！「バスあるきっぷ」の取組み

市中心市街地活性化協議会、福島大学吉田ゼミの学生から、市中心市街地活性化の主な取組みのうち、公共交通機関利用促進事業の「バスあるきっぷ」の取組みが紹介されました。バスでまちに出かける仕掛けとして、バス+あるき+きっぷで「バスあるきっぷ」と命名し、利用者ターゲットを子育てファミリー向け、40代以上の子育てが一段落した女性層向けとした企画で、体験会を通じたアンケート結果の分析を進めた取組みが報告されました。体験会によるアンケート分析結果では、バスあるきっぷの企画は満足、新しさを感じたと肯定的な意見が多いものの、約30%の方が使い方が判りにくいとの回答があり、今後の改善につなげたいとの事でした。

4. 「バスあるきっぷ」開始に向けて

■ ターゲットの設定

バスあるきっぷ ファミリー

毎日子育てで悩んでいるママ〜パパの皆さん！

幼児〜小学校低学年の子どもとその親

会津若松市内の就園児などから、ターゲットとなる顧客は3,000人弱存在すると推測。普段は、バスを利用しない世代が、バスに乗るきっかけになってほしいと考えた。

バスあるきっぷ PREMIUM

日々の通勤りに、ご褒美を。

40代以上の子離れた女性層

会津若松市内の若者は、高校卒業後、市外に流出するケースが多いため、子育てにあてていた時間を自分の時間として使えるようになると考えた。

4. 「バスあるきっぷ」開始に向けて

■ 2018年度は「試行販売期間」に位置づけ

販売期間
2018年11月22日～2019年3月24日

販売場所
会津管内の市内路線バス車内

販売・使用方法

- ✓ 利用者の自宅の最寄りバス停から乗車。降車時に運転手から「バスあるきっぷ」を、一人一枚受け取る。
- ✓ 協賛店は、利用者から「バスあるきっぷ」の提示を受け特典を用意し、券面に押印する。利用者には、裏面のアンケートを記入してもらい、複数のバス運転手に手渡しと運営が100円引きになる。

【図】バスあるきっぷ使用方法

3. 対談：まちを元気にする公共交通の力 ～新たなモビリティサービスを地域づくりに活かす～

福島大学吉田先生とITS Japan天野専務理事による座談会形式で進められました。吉田先生からは、環境変化の認識として、自家用車の運転可否による活動機会の格差、多様化・小口化する移動ニーズ、担い手（運行+運営の両面）不足の顕在化などが指摘され、今後は多様な主体による創発がカギになるとのコメントがありました。吉田先生&天野専務とのディスカッションとして、以下のテーマで論議されました。

①ICTの力で公共交通は便利になるの？

- ・ ICT の力は、現状を超える可能性があり、クルマ、公共交通、歩き、自転車などのすきまを埋める事に役立つだろう。

②地方都市では、くらしの中で自家用車を切っても切り離せない、MaaSやITSで暮らしはどう変わるのか

- ・ 地方都市においては、安全運転支援機能のついたクルマで運転できる日々を伸ばす事や、移動の目的を再整理し、公共交通のあり方を再検討したうえで、クルマと公共交通の連携をどう実現していくかがポイントだろう。

③交通を改善する事で地域は元気になるのか

- ・ 現状の移動は、病院とかスーパーに行く事が中心で、楽しみが目的地にならない。愉しみのおでかけ目的を作れば、外出が多様になり、トリップが増え地域は元気になるだろう。



0. はじめに—地方のモビリティが抱える課題

① 自家用車の運転可否による活動機会の格差

- ◆ 地方部は、鉄道駅の周辺に住宅や目的地施設が集中して立地しているわけではない。自家用車の保有で高いモビリティを獲得。
- ◆ 運転免許返納が叫ばれるが、自家用車の運転を継続する生活と中止する生活の間には、物理的・心理的「ギャップ」が存在。

② 多様化・小口化するニーズ

- ◆ 駅、学校、大型店、総合病院といった「最大公約数」の目的地施設では、カバーできないニーズが拡大している。
- ✓ 人口減少(施設の集約)、「かかりつけ医」、都市の外延化…

③ 「担い手不足」の顕在化

- ◆ 生産年齢人口が減少(過去20年:8,000→7,000万人)し、モビリティを支える担い手(運行+運営の両面)の不足が顕著に。

1. 地方圏で懸念される交流機会の減少

■ 交通の躊躇と将来への不安 (佐渡地域公共交通活性化協議会)

バスを利用しない理由

将来の外出への不安感

大きな不安 30%
不安感しない 23%

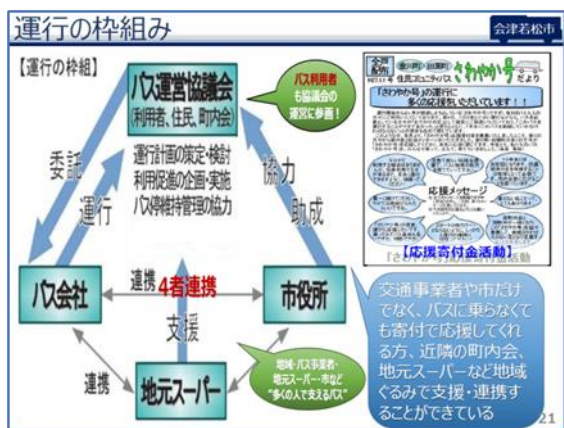
交通の躊躇は、個人の積極的な選択なのか？
「外出しにくい地域」では、市民の交流機会が失われる
超高齢・人口減少社会の直面で、地域経済循環も弱まる

4. 金川町・田園町住民コミュニティバス運営協議会との意見交換

金川町・田園町は、人口約2,700人（約1,100世帯）、高齢化率32%の地域で、会津若松駅裏ですが道路が狭隘で路線バスが運行していない交通空白地域にあり、免許を持たない高齢者等の移動が長年の課題となっていました。この交通空白地域対策でバス事業者による実証運行が終了した後も、利用者からの継続を望む声があがり、地域住民（利用者）・市・交通事業者が、約2年間に渡り膝詰めで検証や議論を積み重ねながら、運行再開に向けて取り組みました。その結果、地域が主体となった協議会がバス運営を行い、さわやか号の運行を交通事業者に委託し、市役所や地元スーパーが支援する運行形態が出来上がりました。



さわやか号



運行の枠組み

(住民・市役所・交通事業者・地元スーパー)



運営協議会の様子

5. まとめ

会津若松市では、元気なまちづくりには交通が必要で、公共交通の課題をみんなと一緒に考える方針のもと、関係者と協働して楽しく移動課題を解決しようとする姿がありました。特に、市役所の方々は、住民の意見は市役所への提案と前向きに捉え、住民、交通事業者との良い関係を築いていました。

地方都市における交通課題には、居住地と勤務地の関係からクルマ中心にならざるを得ない状況の中で、暮らしの足を守るためにクルマと公共交通のあり方を再考し、ICT技術も活用した新たなモビリティサービスを作り上げる事が重要であると感じました。